

28 プリント・ディスアビリティのある者への電子図書利用の有効性と課題

北村弥生（国リハ研究所）

上野久美子、小田島明（国リハ自立支援局）

篠原慶（国立福岡視力障害センター）

【背景と目的】プリント・ディスアビリティとは、多様な理由により印刷物を読むことができない状態であり、1990年代から図書館学分野で使われ始めた用語である。具体的には、視覚障害、ディスレクシア、発達障害、上肢障害、失語症、高齢者等を指す。聴覚障害や知的障害を含んで考えることもできる。日本でも、2010年の著作権法改正により、視覚障害以外の障害者に対しても点字図書館等の指定された者は著作権者の許諾なく電子図書を作成し貸出することが可能になったために、プリント・ディスアビリティのある者への電子図書の活用の途が開けた。しかし、電子図書を活用する方法の教習は視覚障害以外のリハビリテーション訓練課程には含まれていないのが通常である。そこで、国リハで訓練を受ける利用者のうち電子図書の活用が有効であると支援職員が判断した者に対し電子図書の有効性と課題を明らかにすることを目的に講習と支援を行った。

【方法】国リハ自立支援局の支援職員9名と利用者7名を対象として、電子図書と周辺技術に関する体験会を4回、実施した。さらに、参加した利用者のうち希望者には個別支援と機器貸し出しを行い、技術習得過程を記録した。

【結果】パソコン操作の経験と読書意欲があった利用者3名は、スキャナで読み込んだ印刷物を文字認識し、テキストリーダーで読むことを、自習を中心にした最大5回の個人支援で習得し、日常生活において電子図書による読書が可能になった。パソコン利用経験がなく、家族による支援も薄い利用者に対しては構造的な訓練プログラムの開発が必要であることが示唆された。